

【対談】

街は舞台だ、日本は変わる

井上ひさし（作家） × 長谷川岳（YOSAKOIソーラン祭り
普及振興会事務局長）

◎褒め言葉としての「最近の若い人」

井上 「最近の若い人」の代表として、ほくはイチロー君や野茂君を思い浮かべます。このお二人は自分がいと思ったフォームで打ったり投げたりしていて、コーチにフォームをあまりいじらせませんね。もちろん結果の責任は自分が負う。そういう「最近の若者像」がひとつ私にはあります。

このお二人にはマッチョの感じが無い。「俺は男だ！」っていう感じがなく、さらに「ウケ狙い」もしない。「ウケ狙い」はここ二〇年くらい若者たちの大きな傾向でしたが、お二人には本業以外のことで喝采^{かつさい}されてもしょうがないという覚悟ができています。

それから、関西大震災のときに示された若い人たちの人間的な活躍もほ



くの「最近の若い人」観に大きく影響しています。一方ではオウムへ行く若者も大勢いていろいろですが、しかし、なにか新しい、いい感じの若い人たちが現れてきたな、という気がするんですよ。

それにひきかえ、われわれの年代は何だろうかと思います。五〇年間、戦争の責任を取ろうともしないできたということは、新たに五〇年間の戦後責任が生じたということです。ほくも含めて「最近のオトナ」は何をしているんだとひそかに反省するところがあります。「最近の若者は」というのはふつう批判的に使われますが、ほくはむしろ褒め言葉として使いたい。若い人に媚びる気はないですが、やっぱり若い人もすごいですよ。

そして今日また長谷川さんという面白くて元気のいい若い人をひとり知りました。長谷川さんたちの「YOSAKOIソーラン」という祭りのことは聞いてはいましたが詳しいことは知りません。そこでまず「YOSAKOIソーラン祭り」の発生・発展の経過を聞かせてください。

●プレ・ヒストリー

長谷川 ほくはいま札幌に住んでいますが出身は名古屋です。父は名古屋で自営業をやっていて猿山のボスザルというか、自分の子どもでも、少しでも自分の教育方針にそぐわないような形の芽が出てくると潰しにかかる



井上ひさし(いのうえ・ひさし)
一九三四年山形県生まれ。徹底したパロディとユーモアあふれる作風で知られる現代日本を代表する作家。七一年「手鎖心中」で直木賞、八一年「吉里吉里人」で読売文学賞、SF大賞。八三年より劇団「こまつ座」を主宰。

(笑) ような人です。ですから兄も地元を離れて高知の大学へ行きましたし、
ほくも北海道へ行った。

井上 プレ・ヒストリー、前日譚があるわけですね。

長谷川 はい。父はいつも赤味噌の味噌汁、母は赤味噌が大嫌いという家
です。今日の話に直接関係ないですけど、毎日味噌汁が赤白赤白赤白……
って変わる。

井上 紅白の味噌汁というのは、おめでたいお家ですね(笑)。それで大学
は？

長谷川 北大です。登山とか歩くのが好きで、そういうことがやりたくて
北海道へ行きました。ところが一年生の冬に毎日毎日雪が降って、寒くっ
て、ノイローゼになりました。アウトドア派みたいなことを言ってたんで
すが、北海道の冬に押し潰されそうになった。このままじゃ駄目だ、なに
か燃えることがないと潰されてしまうって危機感が……。そんな大学二年
のとき、兄のところに遊びに行って「よさこい祭り」を見ていきなり全身に
鳥肌が立ってしまった……。

◎『よさこい祭り』と『ソーラン祭り』をまぜるなんて……

井上 ほくが知ってるのはペギー葉山の「へ南国土佐をあとにして……」と



長谷川 岳 (はせがわ・がく)
一九七一年愛知県生まれ。北海道
大学二年在学中の九一年、たまた
ま訪れた高知市で「よさこい祭り」
を見たのがきっかけで「YOSA
KOIソーラン祭り」を着想、開催
に成功する。第一回、第二回の同祭
実行委員会代表。現在、同祭普及振
興会事務局長。

いう『よさこい節』の変奏ですが、高知の「よさこい」って、どういうお祭りなんですか。

長谷川 もともとは『よさこい節』という民謡の原曲に振り付けて踊るのがルーツだと思います。それが、この一〇年くらいのうちに若い人たちの参加で大きく変化しました。若い人たちが正調『よさこい節』を勝手にアレンジしてしまっただけです。ロック調、サンバ調などいろいろですが、そのことでこの祭りに参加する若者の数が爆発的に増えました。近くで見ていると踊り子の汗が観客である多くの顔まで飛んでくる。大音量のサウンド、規制のない自由さ、とにかくその迫力に圧倒されました。

それで「高知でできるなら、北海道でだってできるんじゃないか」と、そう単純に思いました。それがその年の八月。

井上 「YOSAKOIソーラン」の「YOSAKOI」のほうはだいたいわかりましたけれど、それがなぜ「ソーラン」と結びつくのかよくわからない（笑）……。

長谷川 「よさこい」みたいな祭りをやりたいと思って周囲の友達に「やる」と宣言したのですが、一〇月まではなにもしなかった。それが一月の終わりがろ突然気になりだして、「やっぱやりやらずちゃ」と思い直したんです。



最初は大学祭でやろうと思ってました。それでまず札幌で旭山音楽祭をやっているリーダーの人のところに飛び込みで相談に行きましたら、「北海道のものがいいじゃないか」って。次に大学の先輩に相談に行った。彼は「大学祭なんて小さなこと言わずに北海道の祭りにしろ」って。

当時はマジメでしたから(笑)、言われたこと真に受けて、全部やっちゃおうと思ったんです。『よきこい節』に匹敵する北海道の民謡はなにかっていったらすぐ『ソーラン節』ということになります。いろんなことが友人たちのアイディアでどんどん決まっていきました。

井上 『よきこい節』と『ソーラン節』とは音楽的に合いますか。合わない感じがしますが。

長谷川 合わないと思いました(笑)。「ソーラン節」は労働歌で暗さがあります。聴けば聴くほど合わない。それで『ソーラン節』をアレンジした方にちらっと話をしたら「『よきこい節』と『ソーラン節』をまぜるなんてけしからん、お前は高知のまわし者だ！」って叱られました(笑)。

それで、もう自分たちでアレンジしてみるしかないということになって、友人たちに頼んで実験的に作って聴いてみるとそれが結構いいんです。



●友達とネットワーク

井上 まあ、なんとか内容はできてきたと。しかし、それを組織していくのが大変でしょう。お金もいりますし。

長谷川 「YOSAKOIソーラン」と祭りの名前も決め、実行委員会をつくることになりました。呼び掛けた仲間五人と一二月の末に集まって企画書を書きはじめました。なぜ「よさこい」なのか、なぜ「ソーラン」なのか説明をつけないといけない。われわれ若者のエネルギーは決して衰えてはいない、眠っているだけだ。その眠りから醒めるにはきっかけが必要で、それがこの祭りだ、一〇年後には北海道を代表する祭りになるって、大見栄を切りました(笑)。

井上 メンバーはみんな友達ですね。友達同士の身軽さとネットワークが基本だったわけですね。

長谷川 みんなもうノリノリでした。国道を閉鎖しようとか公園を開放させようとか予算は三〇〇〇万円とか……(笑)。しかし、組織はつくらないほうがいいとは思いました。大事なのはお金と参加者と許可をもらうこと、そしてマスコミ対策の四つぐらいだろうから、この四つの仕事の担当者を決めよう。ぼくはお金の担当でしたから、協賛金の一三〇〇万円は全部



ぼくが責任をもって集める。

井上 それはすごい(笑)。

長谷川 道路の使用許可は担当の学生が責任をもつ。広報担当は新聞に記事を載せるまで責任をもつ。参加チームは一〇チーム。一チーム五〇人以上一五〇人くらいまでが見栄えの点でもいいので、約一〇〇〇人前後の踊り子が必要になります。これも参加者を集める担当者が責任をもつ。

こうした役割はすべて現役の学生が分担するのです。今年は第五回目ですがこれは変わりません。いまでは一五〇人近くの現役学生が実行委員になっています。

いろいろ決めたのはいいけど、年が明けて一月になってもことは少しも進まないの、もう議論はしない、会議はしないと決めました。とにかく各担当がまず行動する。

●「クーデター」もありました

井上 芝居ができていくときとよく似ていますね。

長谷川 それで実行委員も増えて一月によく動きだしたんですが二月にクーデターが起きました。核になるメンバーの一人が「六月に祭りをやるのは無理だ」と言い出したんです。





井上　ほくでもそう言いますが(笑)。

長谷川　最初の段階で結構ほくが勝手にパッパッパ決めていったんですよ(笑)。それに反発したんだと思います。協賛金も一口五万円にしたんですが、五万円なんて絶対集まらない、三〇〇〇円が限度だって。ほくのやり方が無理だと判断した人たちが夜遅くに二〇人ぐらい集まって、「長谷川、今年の祭りは無理だ。お前のやり方じゃ絶対にお金は集められない。だから辞めよう」と決めた。ここで解散しよう」って。ほくにしてみたら「エエ……」っていう感じで……。

井上　その理屈、当たっているかもしれないですね。それをどう乗り越えたんですか。

長谷川　乗り越えてないんです。無視しただけです。

井上　ああ、無視……。

長谷川　はい。一年のとき、大学祭の協賛金集めに企業を回ったのですが、そのときの経験で出す人は出すという感じを持った。五万円という金額は企業には比較的抵抗がない、それ以上の金額になると企業はメリットを求めるが五万円ならそれは求めないだろうと考えたわけです。

でも最初の一カ月、協賛金は全然集まりませんでした。三月から六月の開催までに経費は一五〇〇万円くらいかかるのに、集まったお金は二七万

円。まずいなーと感じてたんですけど、運が付きだしたのが三月一七日からだ。太平洋フェリーという会社にお願ひに行ったら翌日の朝、「常務が、なんかメチャメチャだけどこの祭りは拡がっていくような気がするって言っている」と担当の方から電話があつた。それで常務さんにお会いして一生懸命話しました。「リオのカーニバルぐらいにはしてみたい」つて。すると常務さんが「君たち、この祭りにテレビをからませてるかい」と聞かれるんです。いや、テレビも一切断わられていると言いますと、「そうか、それならぼくたちも手伝うよ」と言つて、札幌テレビ放送というテレビ局の部長さんのところに連れて行つてくださった。それでその日のうちに太平洋フェリーも「一〇〇万円出すよ」と。協賛金の最高額です。テレビ局も「じゃあ、最高額を出してあげる」つて。それで二七万円になった。

それから今度はテレビ局の営業担当の方にお願ひして一緒に企業を回つてもらいました。二週間くらいで約六〇〇万円集まった。コカ・コーラが五〇万円出してくれたのでペプシにも行く。「コカ・コーラさんは協賛五〇万円です」つて言うとペプシも五〇万円。サッポロビールにも行く(笑)。だんだん波に乗つて、五月一〇日ぐらいまでに一三八〇万円になった。日本の横並び意識というのは怖いなということを感じました。



●戯曲を書くのも同じ体験

井上 拙速にしてはなかなか周到なわけだ(笑)。

長谷川 それから話題性のある仕掛けをと思って知事対談を考えました。当時、橋本大二郎さんが高知県知事に当選されて、全国でいちばん若い知事だと話題になりました。それで北海道知事の横路さんは全国で二番目に若い知事ということになったから、このお二人に公開で対談してもらったら宣伝になる。知事も街のプロデューサーであるはずだから、ぼくたちの感覚と知事感覚をぶつけてみていいだろうと思ったんです。

井上 祭りも一種の演劇だとは思いますが、演劇では、作家とかプロデューサー、俳優でもいいしだれでもいいんですが、とにかくだれかの頭に何がひらめいたら、それを取り出すことが大事なんです。そして、それを壊さないようにみんな大きく伸ばしていく。

高知へ行った長谷川さんの頭にパッと何かが宿った。自分では名付けられない衝動とか感動、ひらめきというようなものを取り出す方法が実にうまくいったんですね。そういうものはだれにでも宿んですが一〇〇のうち九九は気付かずに捨てられていくんですね。プロデューサーというのは、これを外へ取り出して大きくしたらどうなるかって考えている人です。バ

ラバラに起こっていることを全部必然として結びつけていくのがプロデューサーの仕事ですよ。

戯曲を書くのもこれと似たような体験ですね。たとえば樋口一葉のことなら一葉本人よりもほくのほうが詳しくなれる。それだけ研究が進んでいますからね。しかしそれだけではなにも動かない。戯曲にならない。それでまた調べて、読んで、いろいろ考えますが全部使えない。しょうがないから初心に返って一葉の日記をもう少し丁寧に読んでみる。すると「私はもうこれから自分を死んだものとみなす」と一葉が自分に見限る一節が目にとまる。その瞬間にそれまでやってきた戯曲を書くための準備がすべておそろしい勢いでブワッと意味を持ってしまっんですね。一葉というのは生きているときから半分死んでいた。だから生きてる人間のほかに幽霊がいなければいけない。そこまできると、いままでの材料が頭の中でひとりでにバーツと組みあがって、なんの苦もなく——実は苦はありますけれど（笑）、出来上がる。これは『頭痛肩こり樋口一葉』のときの体験ですけど、こういうのを一度体験するともう……。これは世の中でいちばん面白いことですからね。

長谷川 ぼくには芝居のことはわかりませんが、井上先生がおっしゃる意味はよくわかります。祭りを立ちあげていく日々はそういう気分、そうい



う気持ちの連続でした。もちろんいいことばかりじゃなかったですけど。知事対談の場合も、アイデアだけでなくそれを実現しなければ意味がありません。それで知事公館に行つて知事の帰りを待ち伏せする(笑)。黒塗りの車から降りてくる知事に企画書を渡す寸前で秘書に捕まえられ「あなたたち、こういうことは道庁に行つてやりなさい」つて。同じようなことを高知県でもやりました。橋本知事は歩きですから、出合いがしらにお願いをぶつけました。秘書の方は嫌がつてましたが知事は一生懸命に話を聞いてくださった。

それから新聞社に行つて「実はこんな企画もあるんで協賛してくれませんか」と話すと新聞社がすぐに反応してくれて一〇〇万円の協賛金……。

井上 新聞もテレビもおさえちやつたわけですね。あるもの全部利用してしまうつていう感じだなあ(笑)。少し話をはしりますが、第一回目の祭りはうまくいきましたか？

長谷川 祭り第一日目、北海道内の九チームはまるでお葬式の行列でした。ところが最後の一チームが「セントラルグループ」という高知の優勝チームで、迫力もなにも全然違うんです。北海道勢はこのチームの踊りを見てびっくりに、二日目に大変身した。見せるつてこんなに楽しいことなんだつてことがわかつたんですね。一日目は下向いて踊つてたけど二日目はみん



な化粧して派手になった。前日の葬式行列とはうって変わった。セントラルグループの社長さんは高知でレジャー産業をやってるんですが、踊り子一五〇人が高知から北海道へくる交通費や宿泊費を全部持つてくれました。井上　すべてやり終わるといい気持ちだったでしょう。

長谷川　そうですね。三日間くらい興奮状態がつづいて眠れなかったです。ご飯も食べなくていいような状態がずーっとつづきました。打ち上げをやったときにはアンチ長谷川隊がたくさんできていました。高知のセントラルグループを呼ぶというのも約一〇〇人の実行委員のうち九五人が反対してましたので五人ぐらいで強行しましたし、勝手に知事対談を企画したこともでも批判された。七割ぐらいが事後報告でしたからだいぶ敵をつくってしまつて、打ち上げはその仕返しに使われました(笑)。

井上　なるほどね。それで、クーデターを起こした人たちはどうなりました。

長谷川　彼らは祭りの当日まで顔を出しませんでしたけど、ありがたかったのは当日お客さんを誘導したり警備をやってくれたりしました。これは本当に嬉しかった。

●絶えず新しいことに燃えられる仕掛け

井上 お金を出した企業の反応、それから第二回目以降はどうですか。

長谷川 祭りの翌日、警察から出頭命令を受けて約三時間半ほどしぼられました。コカ・コーラからは「看板といつてもことなくちゃくちやじやうちのダメーじだ」って。でも、セントラルグループの社長は「こんな面白い祭り、あったかい祭りは初めてだ」って喜んでくださった。企業のみなさんは企業のメリットではなく、祭りをつくりだすことに対する期待だけで応援してくださったわけですから「来年も協賛できるかどうかかわからないけど、とりあえず面白かった」と言ってくれました。

井上 長谷川さんたちがお金を生み出そうとしていないところも、ひとついいところですね。祭りをやることによって儲けようというやっかいな計算がなかったんですね。

長谷川 第二回目からは前夜祭をやり、チームも三倍の三〇チームにしました。第一回目に協賛してくれた企業は全部同じ額を出してくださって一七七〇万円集まった。

実際に祭りをご覧くださいますが、発電機と大型のスピーカーを積んだトラックが各チームの先頭を走ります。第一回目ではこのトラッ





クを実行委員会が用意して各チームに提供したのですが第二回目からは各チームに用意してもらうことにし、協賛金とは別に企業参加の場合は参加費として二〇万円いただくことにしました。

井上 オオ……逆襲に出たわけだ(笑)。

長谷川 ただし、いただいた参加費はたとえば子ども会で参加するチームにまるまる二〇万円補助するんです。そうすると、企業一チームおさえたら他の一チームおさえられる。そういう抱き合わせでいけばチーム数は増えていきます。

いま新たに問題となっているのは、運営する学生実行委員会の引き継ぐ事業がかなり大きくなってきたことです。そもそも学生は新しい挑戦をしたいと張り切ってくる。そこに引き継ぐことが多いと幻滅してしまうわけです。そこで学生が絶えず新しいことに燃えられる仕掛けをつくる必要がでてきた。

また、祭りが巨大になってくると業者さんから学生が接待を受けるとか利権が生じるとかの気配も出てくる。それで、学生を育てていく姿勢がないといけないことに気づき、普及振興会をつくりました。

祭りに市町村を挙げて参加する若い人たちが出てきて、古い因習や習慣を打ち破ろうとしていることもわかってきたので、そういう人たちを結び



合わせるネットワークというようなことも視野に入れての普及振興会です。経済界などもまき込まないと国を代表するような祭りにはならないですからね。

●意識は国境を越えられるか

井上 話をうかがいながら、国会の不戦決議のときに「私は戦後生まれだから戦争責任なんて知らないよ」という主旨の発言をした国会議員がいたことを思い出しました。よく考えてみると、戦争を知らない世代の人たちは前の世代の悪い所も受け継いでいますが、同時によい所も受け継いでいるわけですね。どの世代の人も前の世代から受け継いだ悪い所をなくしてよい所を次の世代に渡していかなければいけないけれど、現実にはよい所も悪い所も全部次の世代に来てしまいます。だから「私はよい所だけいただきます」というわけにはいかないと思うんです。

長谷川さんたちの祭りでは、そういう世代の受け渡しがいまよくいっていると思いますね。前の世代の力をうまく引き出すという点でいい流れをつくってる。

長谷川 この祭りの流れで若い人たちの芽が出てきていると思うんです。いままで前の世代から全然相手にされなかった若い人が、この祭りの踊り



を教える立場になって商工会の人たちから「先生、先生」と呼ばれるようになってきたりしている。上の世代の人たちが若い世代の必要性をちよつとだけれど感じはじめた。頼りにされると若い世代も張り切ってきます。祭りをやりはじめた意味がだんだん出てきた。

井上 意識が国境を越えられないはずはないんですが、実際にはむずかしいこともあります。市町村にも境があつて、その境がなかなか越えられない。小なりといえども村や町も官僚組織ですから、前例だとかメンツだとかをたくさん抱えこんでる。そこへ「YOSAKOIソーラン」という北海道と高知を結び日本をはさみ込むような形ではじまった動きが出てきた。

これは本当にいろいろな可能性があると思いますね。しかし、実は、行政というのはとんでもない力を持っているんですよ。行政が動くといつてもないことが実現できるのも一面の真実です。そういう行政の力を、そこに住んでいる人たちの手に取りもどそうというところに、この祭りはどうもつながっている。

長谷川 北海道は過疎地域が多くて「YOSAKOIソーラン」のようなきっかけを欲しがっている市町村が多いんです。地域から若者たちが逃げ出さないで生きていくきっかけになる方法はないだろうかと真剣に市町村は考え、いろいろ取り組んでいます。そういう問題に若者と連動してやって



いる首長さんもおられるけど、全然そういうことに理解を示さない市町村長もたくさんいる。

しかし、いずれにしても、状況は若い人たちが力を示すチャンスがきていると思います。若い者が活躍する方法はまったくゼロから何かを創っていくか、危機的な状況に陥っている組織に入り込むかです。チャンスはあります、「街は舞台だ、日本は変わる」がぼくらのコンセプトです。

●変わりばえのしない辛い毎日のうえに祭りがある

井上 祭りというのは日常にはないものが突然人の力で現れてきて、それが大勢の人びとを興奮させ、三日なら三日でなくなってしまうものです。ところが、生きているというのは毎日同じことのくり返しで、ちっとも変わりばえがしない。退屈です。その退屈な時間の質を高めていこうというのが祭りだとも言えますね。

演劇で言いますと、稽古というのは実に辛い変わりばえのしない毎日の連続です。そしてある瞬間、人前に出たときに祭りです。辛い毎日があったうえで祭りがある。ぼくには「そこが常に宇宙の、世界の中心だ」という考えがありますが、そうでないと人は生きられない。いろいろ辛いこと、つまらないことはあるけれど、俺たちの住んでいるここが世界の中心だと



思わないとね。そう思える装置を町や村に取りつけられるか、これが最大の問題ですね。

長谷川　　こういう動きがあるということ年全国の学生にも呼びかけたいんです。「街は舞台だ、日本は変わる」って。

井上　自分の一生は何かを表現するためのものだという自覚、おれは生きてきたぞ、こういうことで生きてきたぞということ表現するために人間はそれぞれ命を授かっていると思うんです。むかしはそれを主張する条件がほとんどありませんでしたが、いまはそうじゃない。

人間はちゃんと自分の表現をしている人を見るのが何より好きなんです。野茂やイチローの活躍をみんなが見るのもそうだからです。持ってるものを素直に表現している人を見ると人間にとって実は喜びなんです。いい戯曲で、いい演出家で、いいスタッフに囲まれて、いい俳優が自分の極限を表現しますと、これはもう理屈ぬきでみんな感動する。そういう意味で人間というのは結構信じられるものです。長谷川さんたちの祭りがそういうもののひとつだということを今日は教えられました。長谷川　そんなふうに言っていただいて嬉しいです。今日は本当にありがとうございました。

※この対話は月刊「宝島」一九九六年三月号に掲載されたものです。対話者の写真／村田倫也

1996年6月28日 発行 株式会社すずさわ書店
「YOSAKOI ソーラン祭り 読本」より